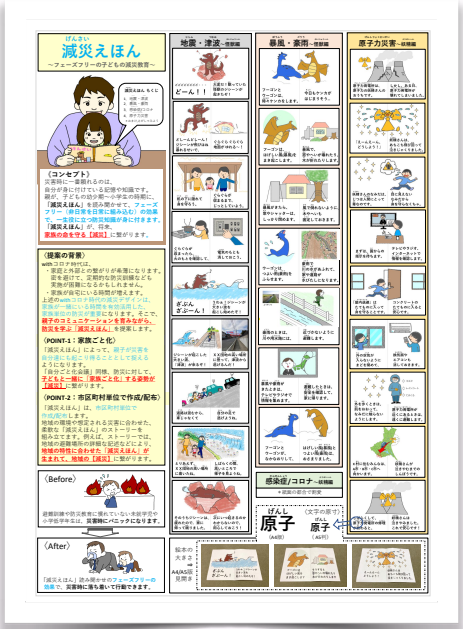
【審査員賞】【荒木 裕子 選】
No.03「減災えほん ～フェーズフリーの子どもの減災教育～」
田中かずさ、大嶋恭子、齋藤芳徳　茨城大学 教育学部 学校教育教員養成課程　教科教育コース 美術選修 3年次



受賞コメント

「減災」と「絵本」を繋げるアイデアは、子どもの頃に、絵本を読み聞かせしてもらった、楽しい思い出から生まれました。「減災えほん」が実現したら、災害時の助けになるだけでなく、子どもたちの思い出の一つになって欲しいと思います。今回は、「withコロナ時代の減災デザイン」のテーマに対して、アプローチの仕方は、多様であることに改めて気付きました。これからも、減災について、視野を広げて考えていきたいと思いました。

評価コメント

子供に読み聞かせる魅力的な提案である。家族の構成は多様でそれぞれの家族が減災えほんを作り、子供に読み聞かせ、その子供が成長し新たな家族で減災絵本を作り子供に読み聞かせるような循環モデルが生まれそうです。（齊木）

個人から家庭、家庭から地域での段階的な取り組みが示されており、新型コロナウイルスの影響下で、私たちの生活圏を考えざるを得ない状況を反映しているように感じた。（荒木）

デジタル化が進む中で、あえて親が子に読み聞かせる絵本とし、読み聞かせることで双方向のやり取りでより的確な理解を得ることができるでしょう。読み聞かせマニュアルが必要かもしれないですね。（相良）

普通に「絵本」の発行をテーマにする発案は（当コンペでは）これまでになかったので、新鮮に捉え高い評価をさせていただいたが、その内容には多くの課題がある。まず、この「絵本」とするテキストがありさえすれば、親から子へ、大切な情報が伝達されるのか？という疑問。また絵本の内容面の質はどのようにもたらされるのか？（ここに提案されている中身は、実際に作られる絵本そのものの内容なのか？だとしたらとても心配。）防災情報の発信は、これまでに多様に行政等も展開・普及に努めているが、それでは大切なことがなかなか一般に浸透しない。だからこそ、どうするべきか、という発案には期待がかかるわけだが、提案されている絵本の中身はその期待を満たすものには遠い。（平林）